



報仇

皇田比羅神書重記

九

^ 13
3324
9



へ 13
3324
9

繪本金毘羅神靈記卷九目錄

八本丹波守坊を小劍法と教授の作

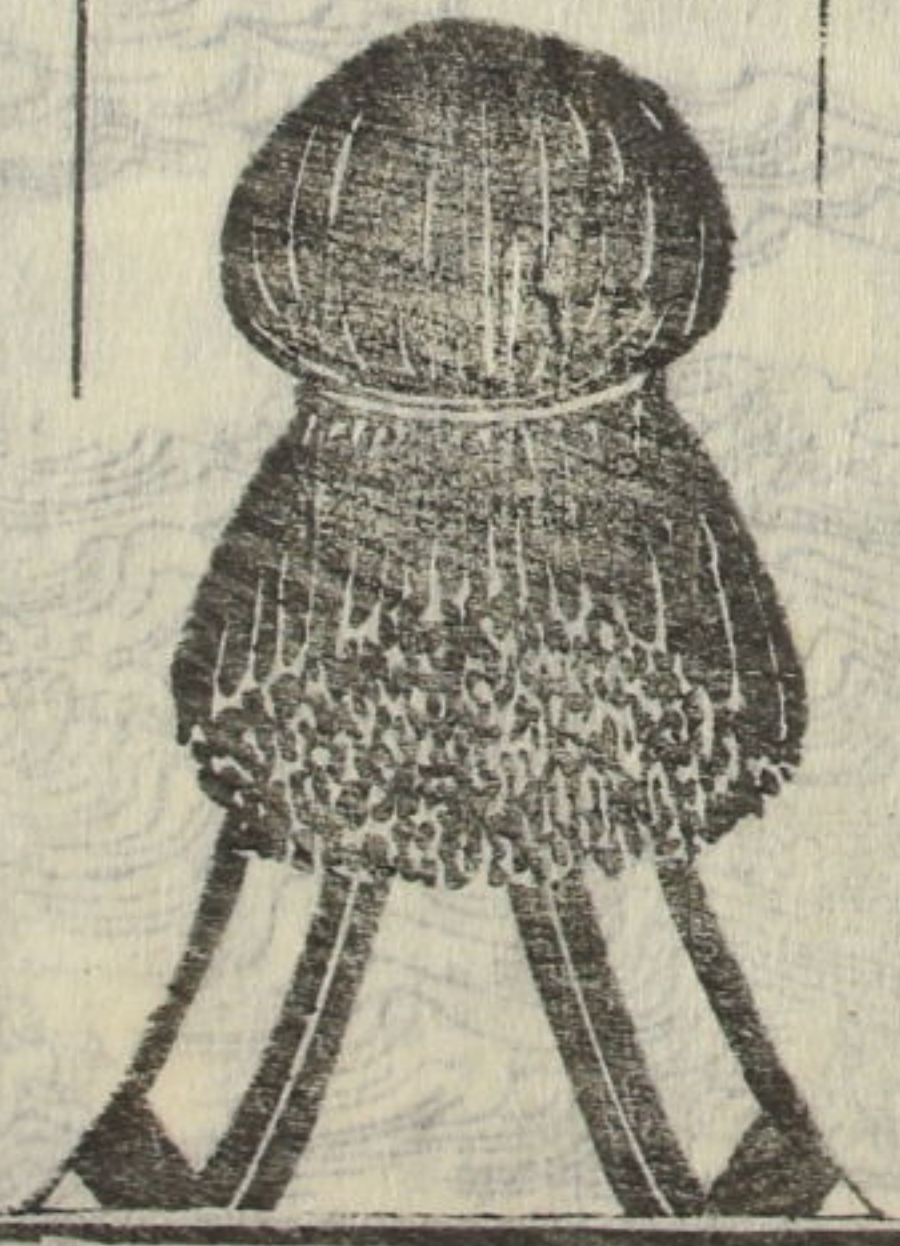
民吾坊を妖怪と怪門圖

民吾坊を改名の作

坊を水沢怪を奉と法む圖

民吾小を帝宿意瓜を法

足利義滿を小を帝宿意瓜を賜入圖



本大學出版部
五十八卷

小吉舟 武は操練の圖

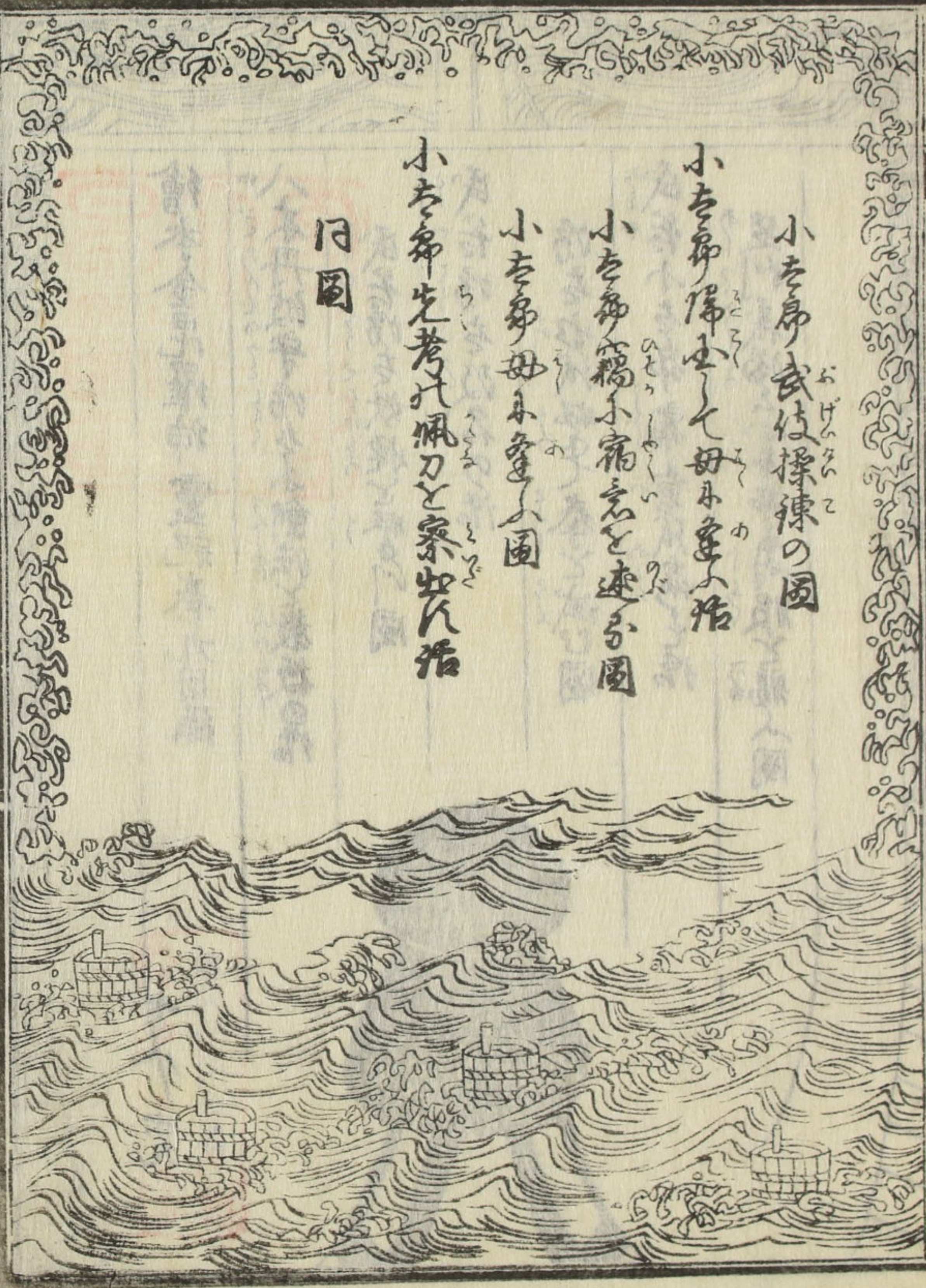
小吉舟 舟小吉舟小吉舟

小吉舟 舟小吉舟と速る圖

小吉舟 舟小吉舟小吉舟

小吉舟 舟先考此佩刀と案出ん活

日圖



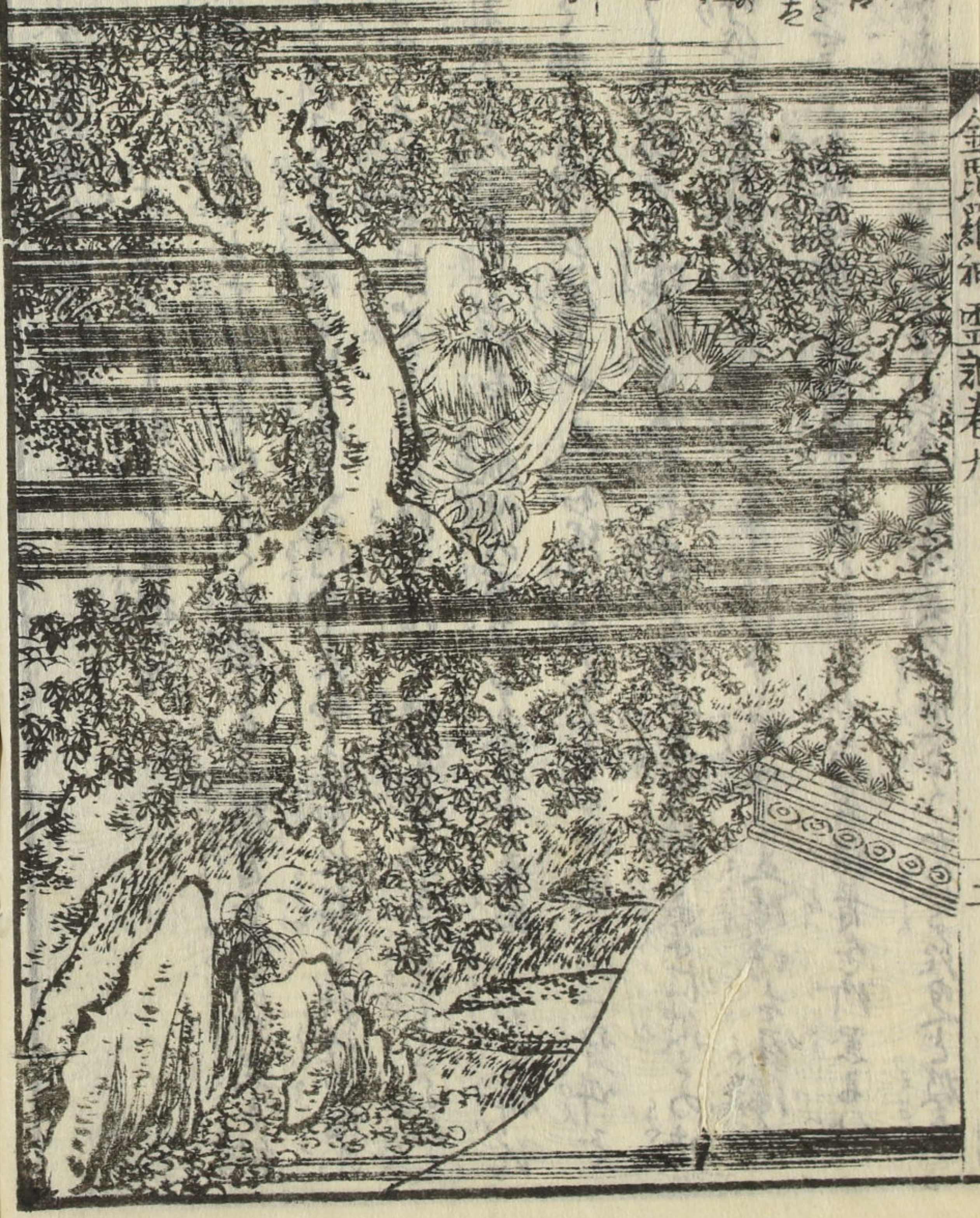
繪本金毘羅神靈記卷之九

八本家坊を小劍法を教授の活

却説民皆坊をと宗親の命に上りて後園小至る枯骨を拾ひ竹笠を納
繩ををりて柔放流小浮舟ありて何れも小舟に白死形のもれ淫の傍小
卓尔と之凡常此小兒ありてせは膝と滑り逃走ありて又甚しき小舟
心氣はも失ふ危れん坊をと狐狸の爪をさすて一き着破りおも怖れ
強く眼もかけを捨て其茶碗は色人とさる時彼もの一響叫ぶ
飛う多六坊をも坊は子孫奉て首と思ふ事を確と撃は彼もの吐
せ舟のく地小例ありて狐是白くも火酒を縁端小立浮坊を浮舟水
と若せば宗親近侍と化小縁水せく見ぬふ坊を枯骨を竹笠を納
て坊敷色おしも愛せられぬ小舟異の小児ありてを發せぬ人となん



中
氏
防
妖
怪
上
松



深くも賞せしむれど大儀なり体息せよと命にのり坊を畏るは遠く遠上
手先の血も深し伏宗親早も見替ひ其子細を向ひぬ坊を遠くを
あう行く湯の怪物と撃たる湯身を告せ伏宗親大のふ不審し坊の
侍居と流坊を杖留守せして彼處に待て見ぬに美も坊を告ふ遠
句にその坊身も終ひ地上小外との何う道侍之雲燭を照して親親の
具妖抱ひあはそ尚水の葉乃并河元脱とふその肩間守守好く好ど
切割るごとく死傷と交面形丹も深く痛く若し心作るる宗親は死状
は見えく打突ひの葉なる元脱某も坊を令せし杖を流し七回切替の
とれと獲り途中にこそ恐怖とせんと計打て禍ひを招とらるるぞ
あの方を懐んとせし葉長まら死奉動不居るは急な替替も十付人
と義るれども既不斯のてく辛日に遇ひ殊小助由若身入しは

あは移る今我の始末は法小なる間事房も送る保善とせよと命に
て履前小帯入のひしと道侍の内面三人元脱を介抱し竊ひ子房も送
葉は用ひて若痛ぬ不流し一かども其救うる病葉と枝葉一尚も
面形の手傷成ぞ癒せし先分斯く翌日小あふ宗親坊を杖留とるひ
伏宗元脱の眉間を刺し掌把の跡磨丸磨れなるよ交母あはれ何して
御杖得るも甚不審なり故あはれ隠れ告途及くせ作ありたれ坊を
伏し小笠宗親危急小道り止ては法を只も杖奉り撃ひをり
るるふ不審も傷ひる後悔は藤忽の腹許免下とふしと流し畏入
たる作るるしと宗親まひて吾其交を替るにあはれ子孫を感とる
故より心得たてふ背申し隠れ云安よと再三詰問ひたれ坊
を頭をあげ流るるは別れ習殊紅は依りしは但南河宗一孫

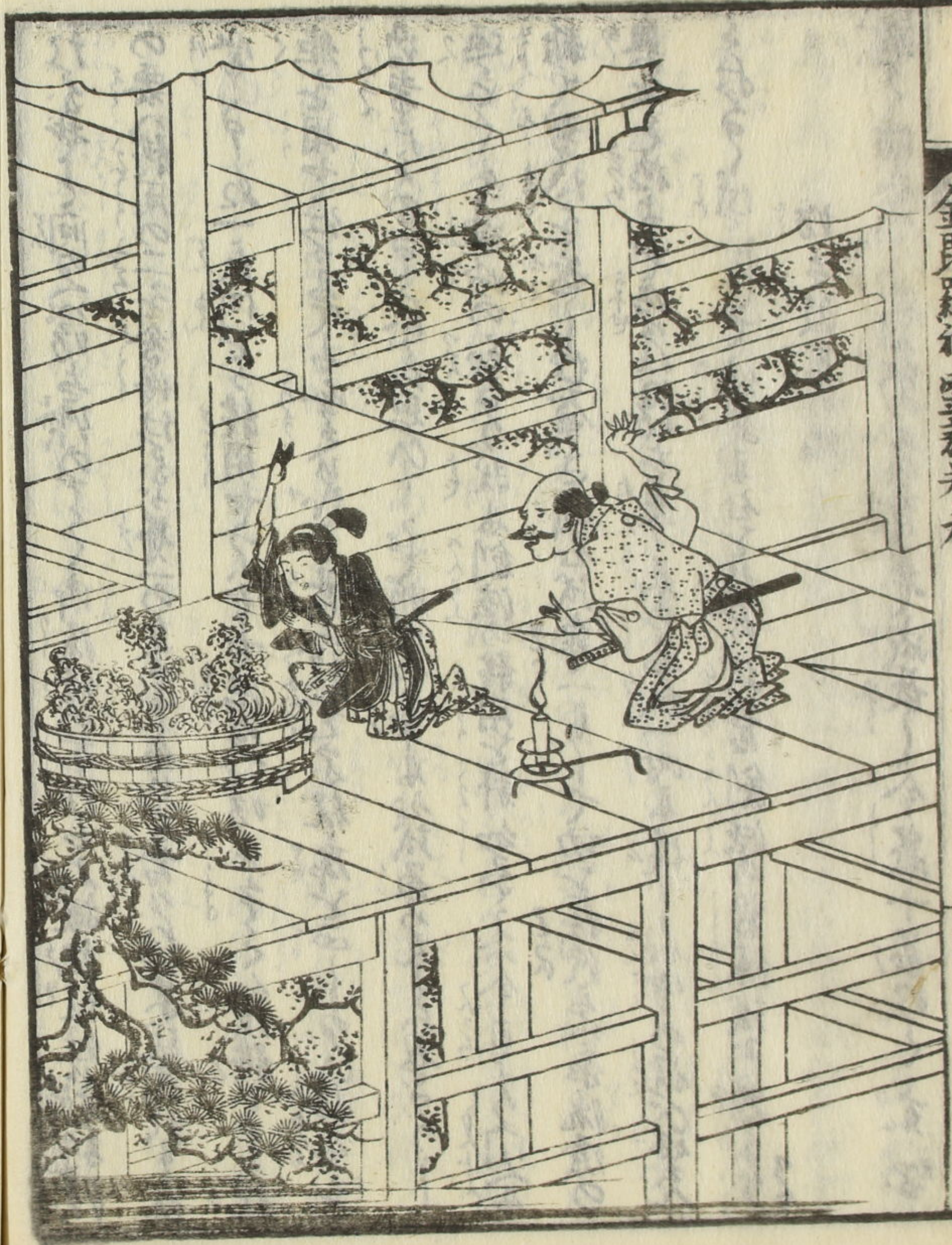
民計
防太
水成好
春
成心

金田羅神聖元卷九



六

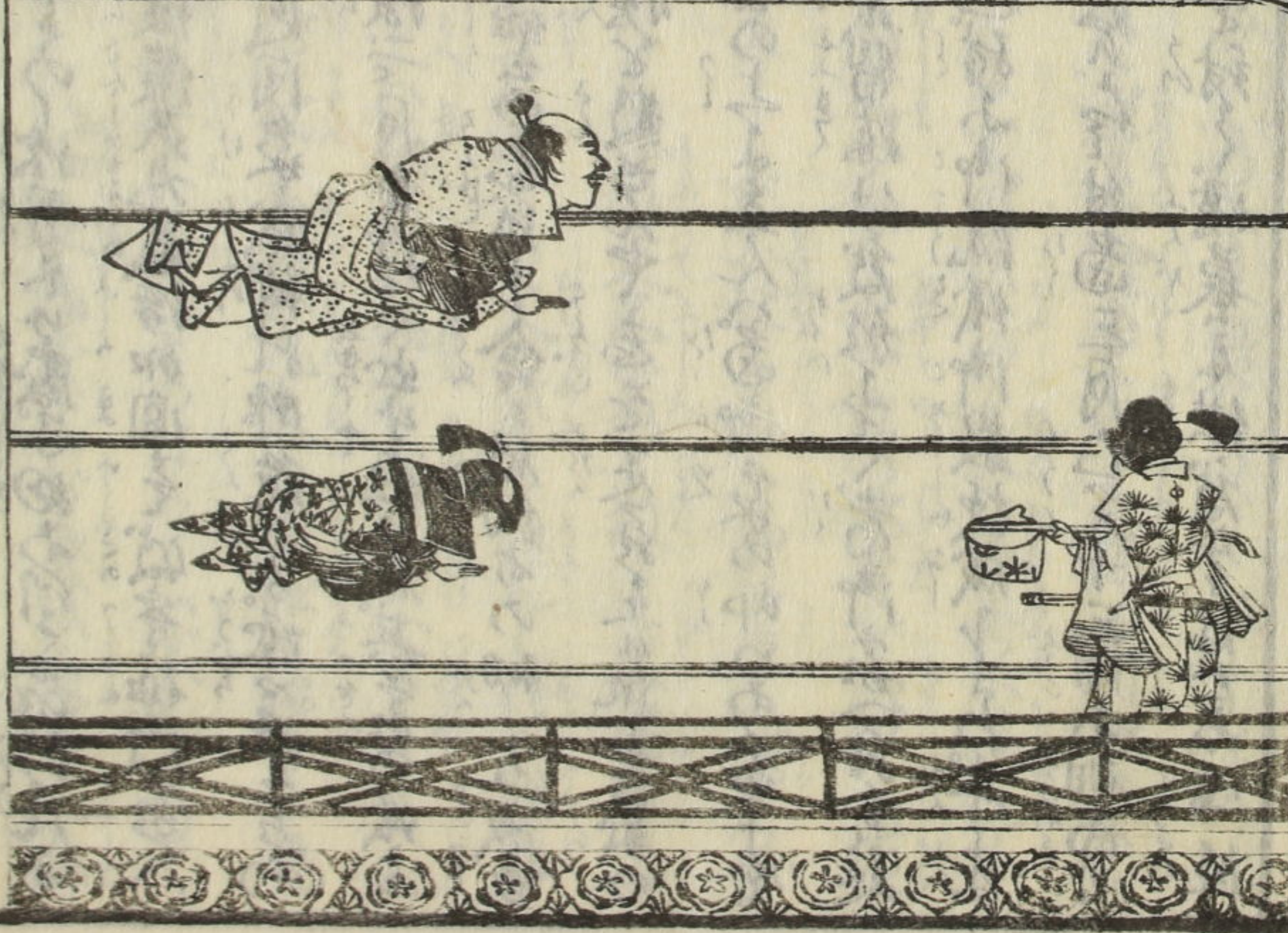
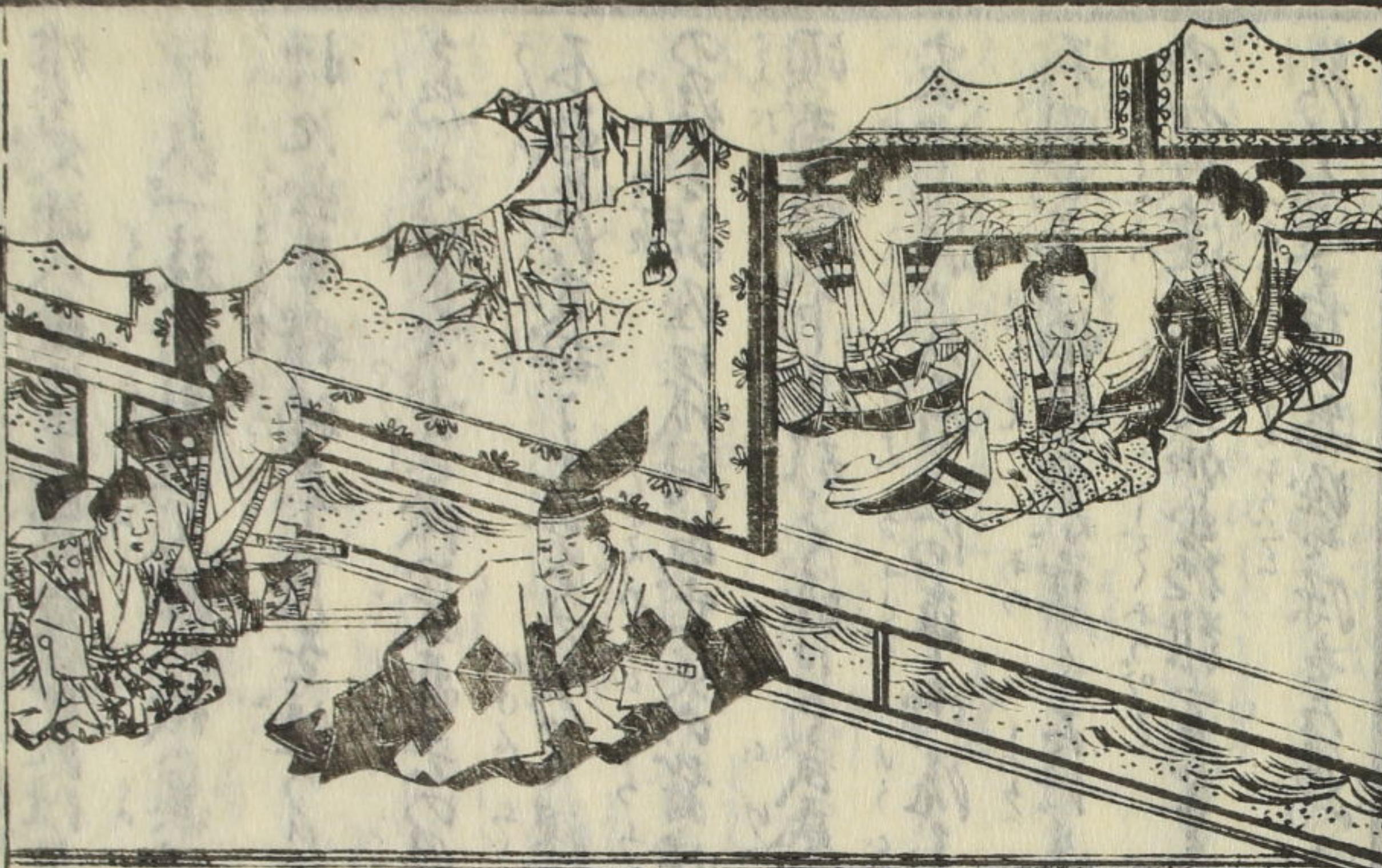
金田羅神聖元卷九



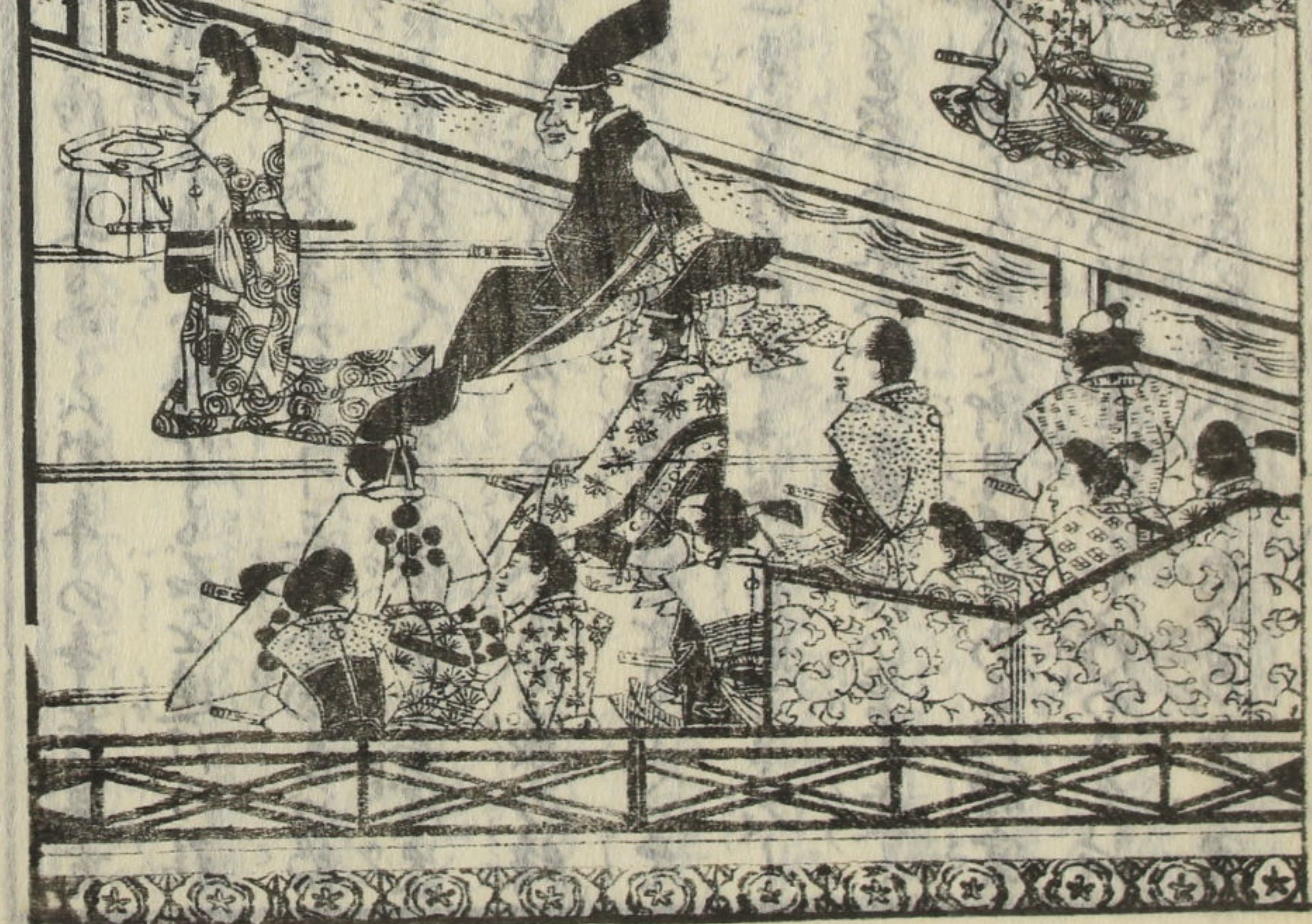
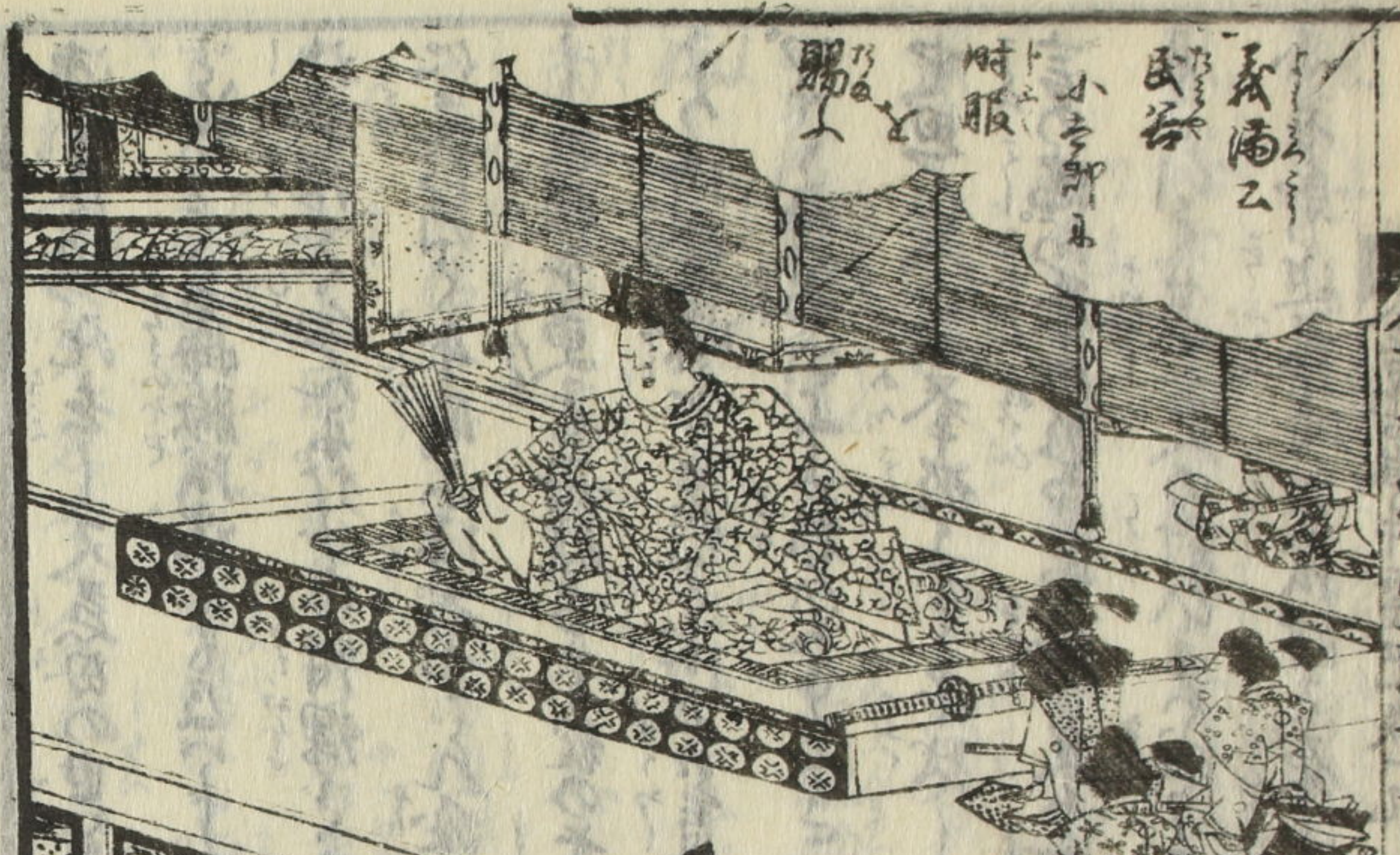
五

藝に長下二夜叙法と授く者深せし先のひよを以奉道姑の用を勤ふ
 の外他幸ハ一各に放下只管修行の功法候て日々精進し教と更だ
 して粗其要成自得さるる間ありければ宗親も未獲しを天賜ふ年
 候て我一流を承く世は傳ふる候と神交する人々をばば上進
 のらん其湖の進小度とて益効勸督責を加へ候れり先のひよに
 候く未教年と越に貞治三年小寺長十三歳に及ぶ武藝之ひよ進
 尚果も能く高昇れつんとすも優劣諦先交し難れ候ふぞありなる
 于時貞治三年二月上旬の頃小寺を執思ひする我父の體弱人一人
 の母以重く國代出當おれ書育と更く已れ七年れ月日を送り候の
 ごとく尚果此武藝と想傳ふと令く父の亡靈母の誠を曉し我をば後
 志候ふ故より思つて人の死生の約を待たぬ月日候に内解候は

涙を流し死去し又是母の世と去り大妻もあらず教年の幸若鳥育
 り候て子悔願候も及ばず我湖未進候も及ばず石を遺候の結
 非をばく向んぬむとて討譯くあはれ今年ハ父が十三回小寺に候
 に先づのく中園小寺あり候はば責候討て孝考小僧人中表候史
 一衣服を更く丹波お宗親の衣よは漢くやうふ人系七歳の時
 より所愛候をそのく御書育候下されし御高恩云候をりつて候
 かなんぬあけしよは候ひなまを二系小寺に何年御書成下り候
 中思ひ入るる奉形より年伏し候はば宗親と小不審し候ひ事小妻
 言の駕何年の候るや候更に宗親より言はれ御書成候もあはれ時宣
 小寺御近寄り候はば原小寺養ふ民若源八し中老の男老老空



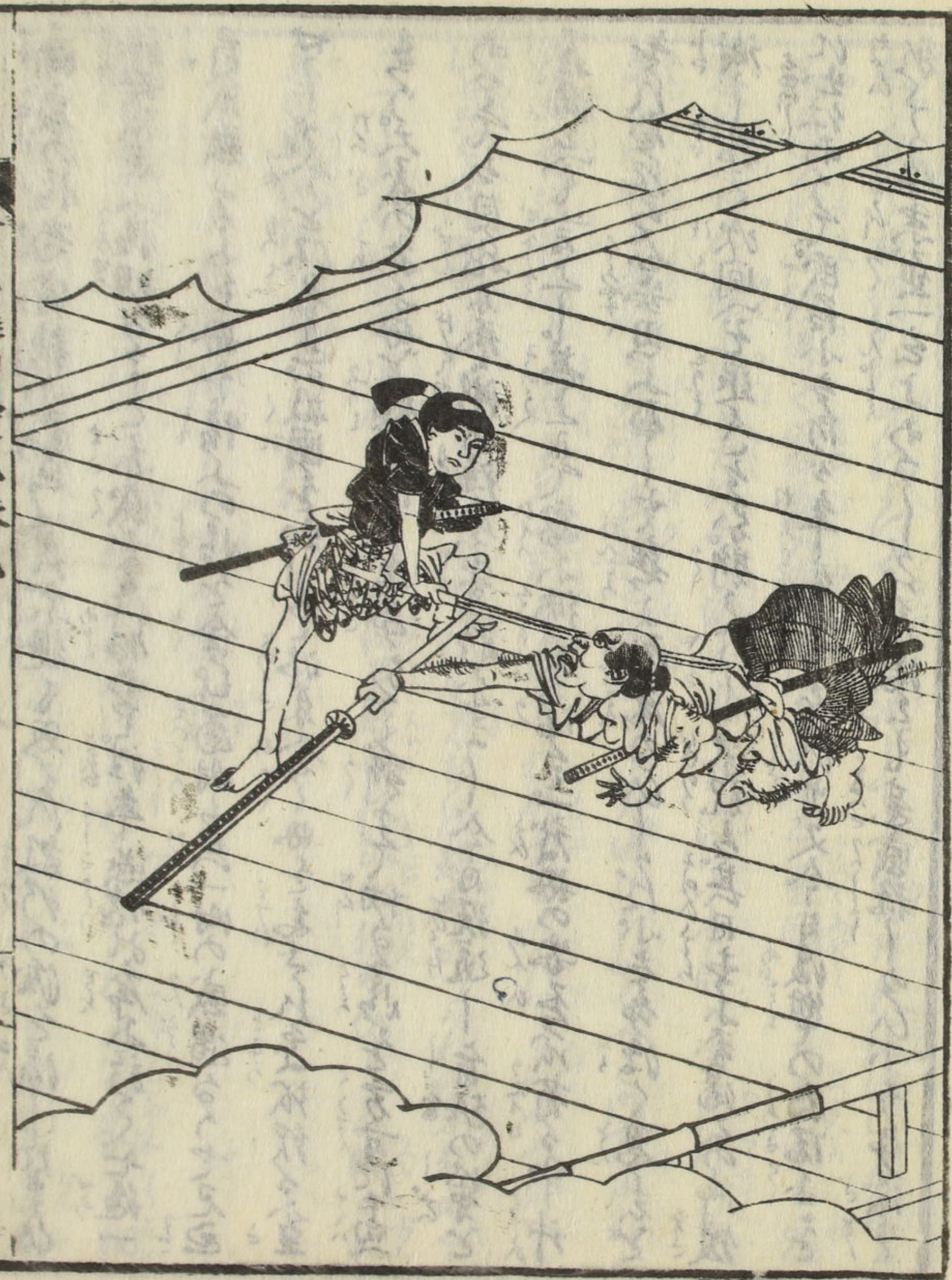
乃賜人
時服
小吉御用
氏名
義滿云



の上達抜群るうとくどもあざ十三歳の小腕成りてく。四圍を双の
堀に母對んと難卵とらつて磐石を堅がわし。今より二に年がやせ
習練を加へば我流儀の奥秘究究ひるふ如く。汝流儀の奥とたふ
究先づいへば今堀口山を抜の勇まありても御畏る事形。少年の心
身て其意とあふりたきども速成人と欲まて却て幸と傷ふべし。
相くまが弱ふはひ者数年修磨の功成るは。父が十七回を詔し。未
も以後に於て意氣用ひて。教授を。を。不。致。流。し。ば。致
の。海。玉。成。止。の。い。く。ふ。小。舟。舟。の。宗。親。の。海。名。原。姑。本。徹。し。父。母。を
激。し。海。中。頃。び。に。年。伏。て。苦。も。あ。る。じ。が。新。く。有。と。奉。ま。ま。の。清。原
恩。報。と。ま。ま。と。群。も。う。い。清。志。不。成。の。後。至。教。材。方。と。初。し。海。原。乃
功。城。積。其。人。身。て。後。世。の。後。を。て。身。成。ひ。む。形。義。少。年。未。熟。の。氣。を

とく。四圍を双の堀に母對んと年々とは其身を顧み侍奉勿ものせ
清原意の程恥思ひは郷貫成出言も母對面は。父。高。清。家。は。あ。ら
よ。と。池。田。と。傍。う。最。故。意。後。宜。と。も。は。ら。既。不。七。年。成。也。い。得。も。今。終。を。何
を。仕。存。生。火。也。日。夜。心。中。の。と。度。合。成。安。し。わ。く。家。母。依。も。小。子。高。清。家
は。あ。ら。の。依。の。あ。ら。も。得。居。あ。ら。と。先。年。之。破。釋。ま。て。是。は。後。を。あ。ら。と
依。ら。推。察。之。仕。中。存。ひ。の。天。切。維。の。小。子。其。初。を。唯。今。と。何。の。事。に。は。決。は。り
未。也。云。憂。若。は。る。小。子。に。十。倍。の。に。な。く。其。情。成。素。し。り。一。日。と。送。は。り。十
日。見。第。一。也。而。陰。運。を。天。日。に。せ。高。三。月。月。保。玉。は。堀。に。也。勝。負。を。決。し。母。も
安。成。り。と。せ。且。お。子。依。も。投。半。衰。慕。の。情。を。懸。し。く。花。夜。を。得。は。り。れ。ら
ゆ。も。神。教。條。の。有。心。魂。小。徹。し。作。傳。も。必。後。母。を。慕。ふ。の。私。念。と。改。後。世。の。人。而
と。立。真。の。孝。善。と。ま。し。惟。べ。し。や。樂。く。言。成。る。は。と。惟。母。子。の。文。性。止。の。が。て。

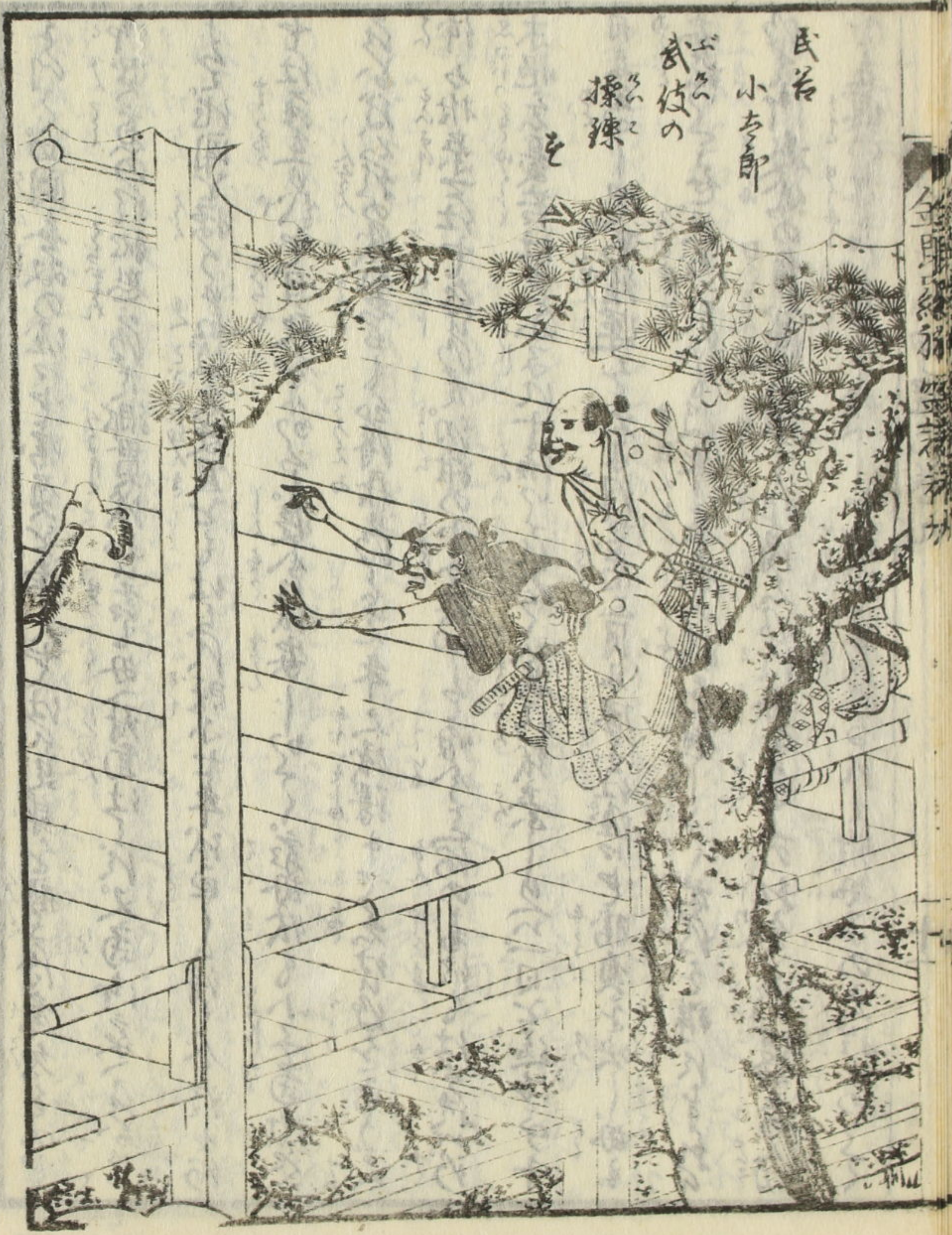
全職總編 卷九



十二

氏若
小左郎
武伎の
操練
を

全職總編 卷九

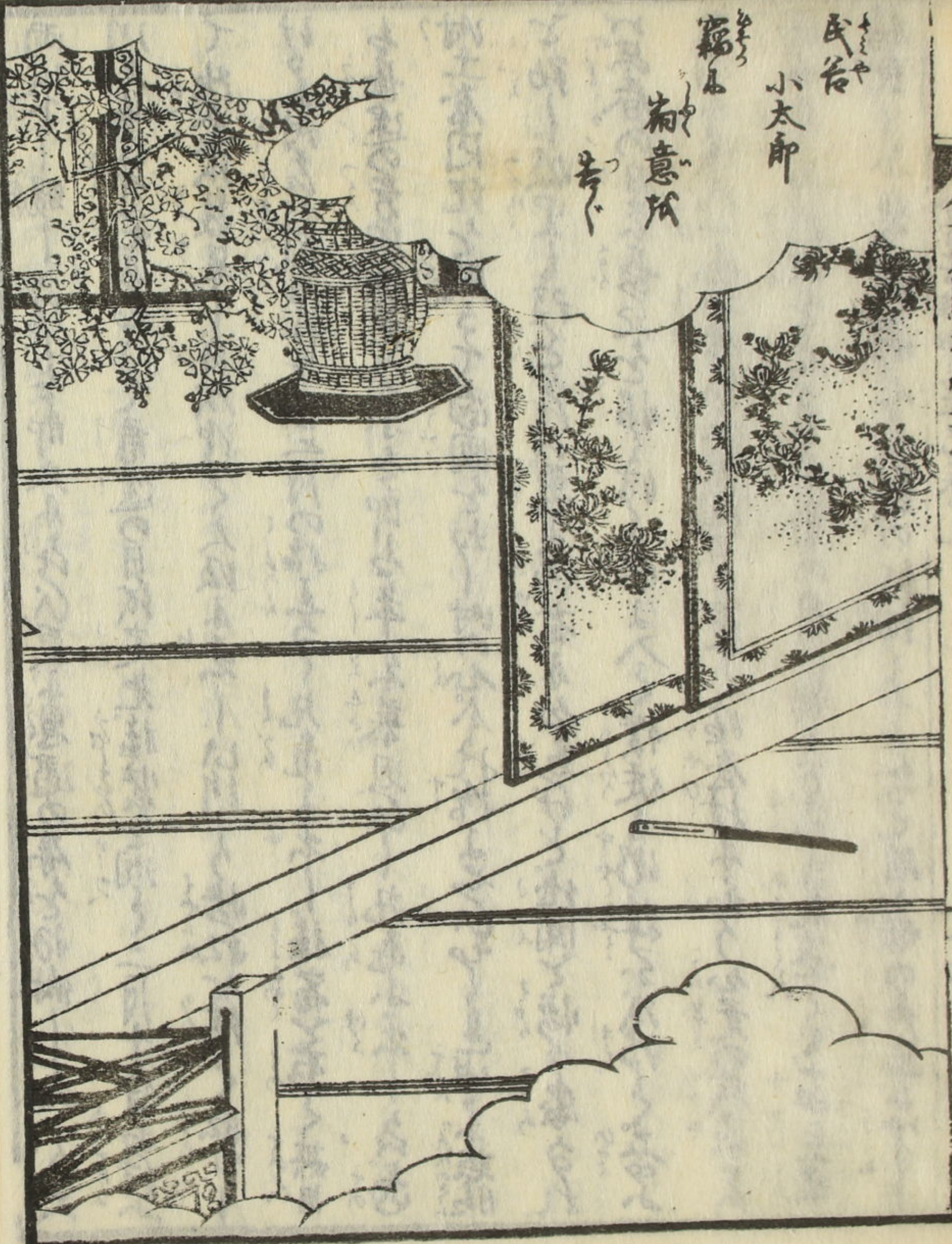
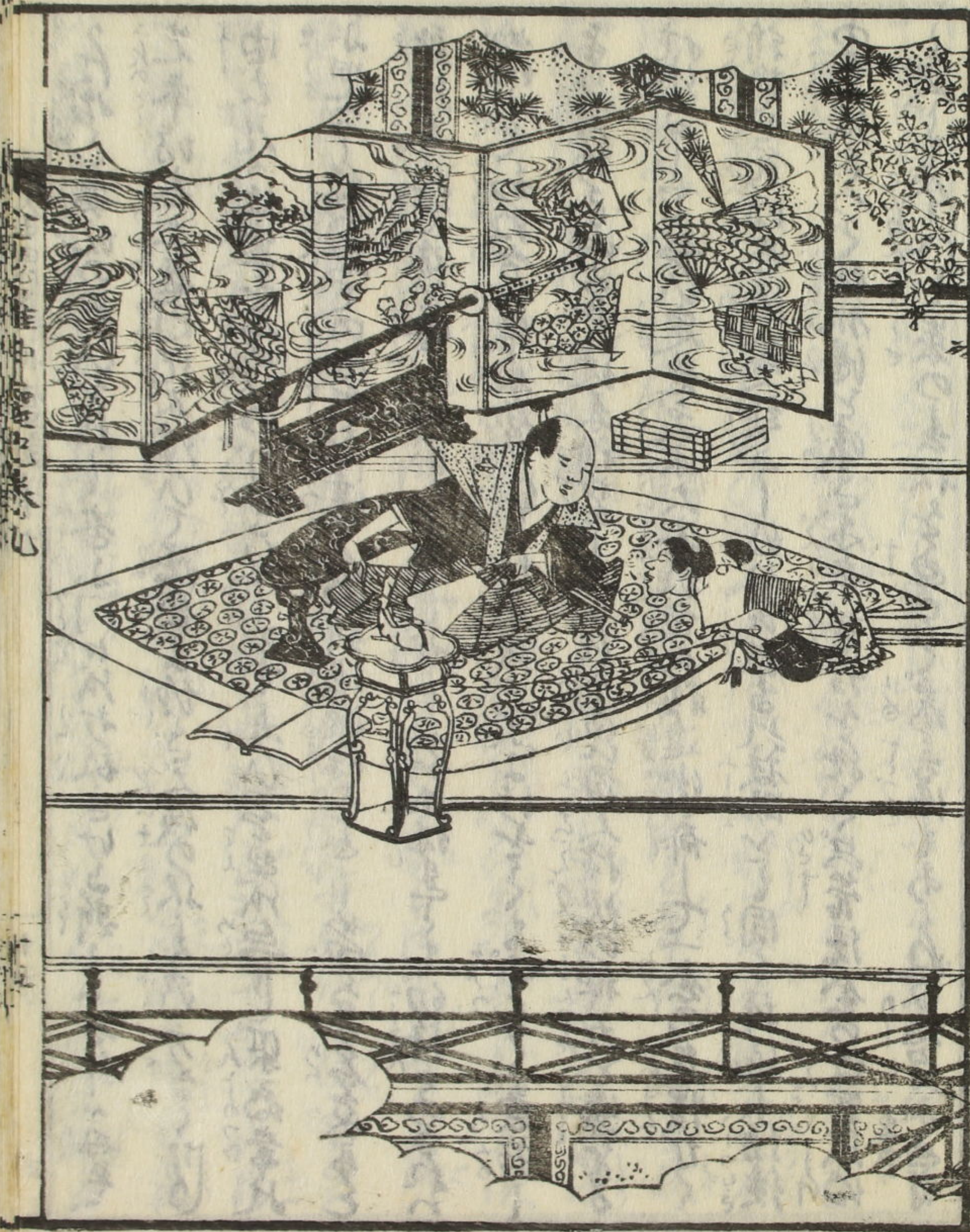


痛哀の情を容貌小致して、大親も思て大救りの涙を流し、幸ひ
汝母以思情切なりと亦感どもに好む。性年慈愍、此序小致して七絶一
首、瓜職するも母を情の情を合ひ、當時只一時の感遇なりや。是
せしむると、以て五六板圖を由り、以て来念々母を思ふ、其
まろ、大親の抱ふ母と、親も亦思ふ、新を切る情を、方すに、
あるまじく、自然小親、此の性、應寺、好まじく、今日後通、一
首、張の情と、我満も言上、其上、年、露小親、里、
をんを、えらる。公、安思、小、
謝、
に、
致、
於、

年、
宿、
意、
雨、
は、
は、
ぐ、
意、

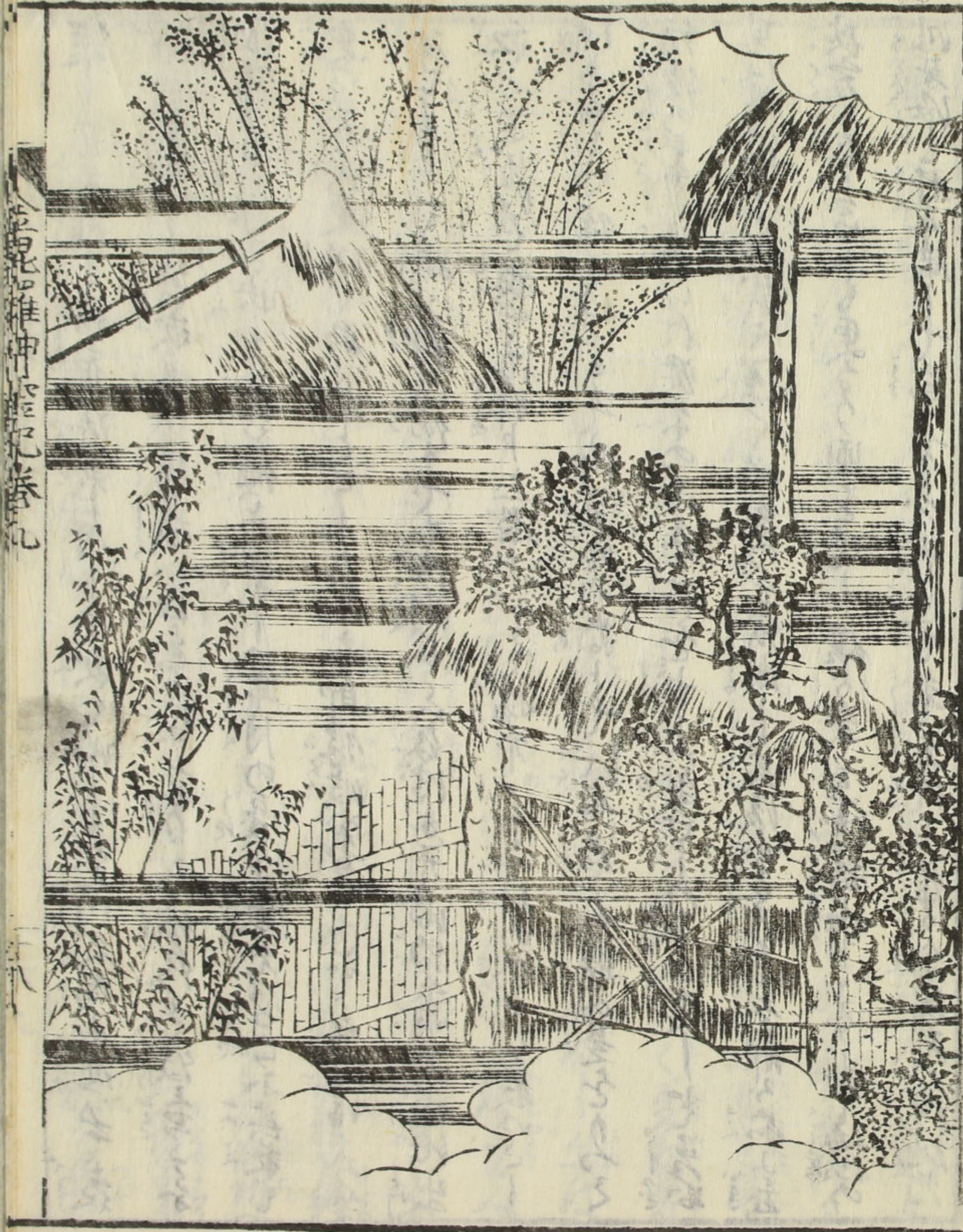
小を即降して母小童人活

斯く書目小致して、八本、不親、永士、之、馬、と、
あ、
あ、

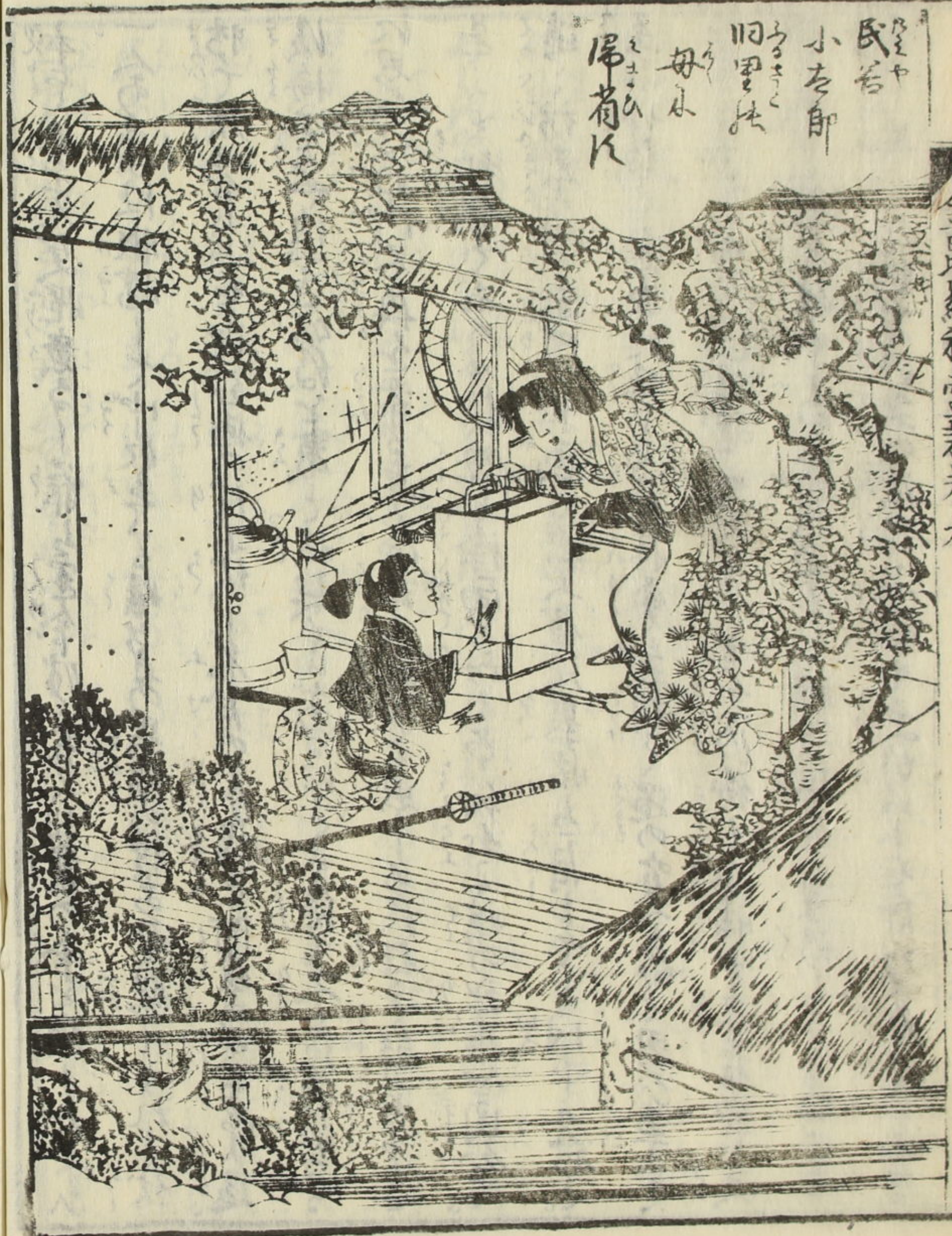


ぬがりにぞと向あり。小を即成を拜ひ武位者まれば。八本家へ立寄。
 園らにも是利將軍の御姑長海家の所扶助と云く成人のめく武位の者
 凍成もぬ。びは家親に意の命にう宿不帰をき。板橋屋具も法活も。
 母きて其長をうむる。おやがら。お程の志と抱。あう。今又何れも。
 海心を紙い不いあり。お程の志と抱。あう。今又何れも。
 あくばや。お程の志と抱。あう。今又何れも。
 一。速不仇を付んと。お程の志と抱。あう。今又何れも。
 費へ何まぞや。お程の志と抱。あう。今又何れも。
 本り。お程の志と抱。あう。今又何れも。
 君。お程の志と抱。あう。今又何れも。
 大。お程の志と抱。あう。今又何れも。

一人ある子は。お程の志と抱。あう。今又何れも。
 後悔は上。お程の志と抱。あう。今又何れも。
 此。お程の志と抱。あう。今又何れも。
 切。お程の志と抱。あう。今又何れも。
 其。お程の志と抱。あう。今又何れも。



五世目 徳川 家康 公



氏若
小左郎
旧里法
母小
帰省片

五世目 徳川 家康 公

まは娘も名残とおおせのせぬ面と云い。汝國も。幸を祈る求む人
おむも孫子に河海日く勉勵精進して身く意をたおられし制示の辨に
小を即と意氣凛々せし。其後母放くは中にも沖雲公下さゆまどり水
越く帰仕は訪垣口が白波首を討ちて津目ふりけりし。おぼろしく起す
別を告ぐまわし。幸なく帰し母が機僅に二枚の袴も不復をく別
の悲し。首も後と所てく。おぼろしく歸路をまは娘も鹿月之野も。小を
が親見あらずて見送り。互の情哀ありあはれあり

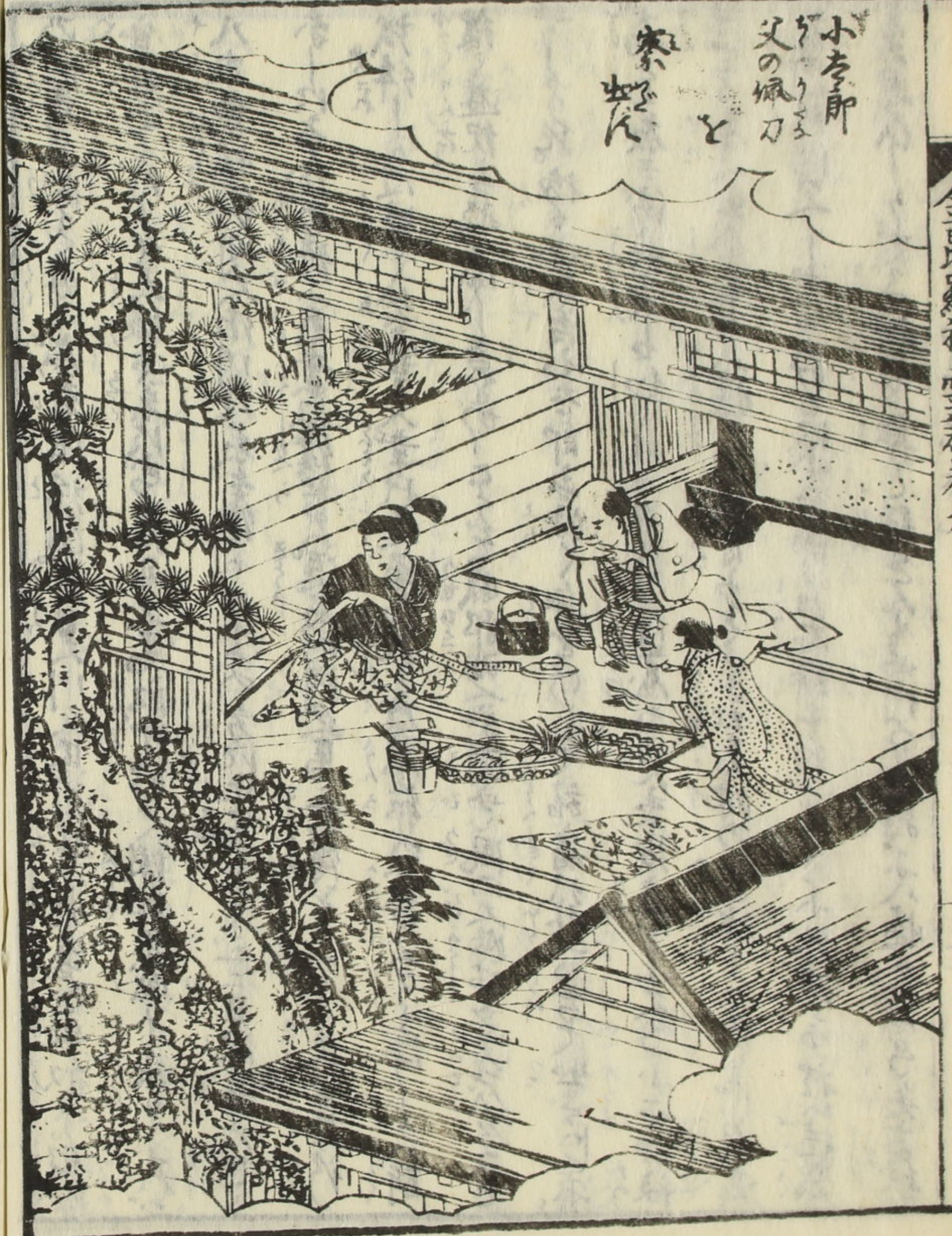
小を即亡父の佩刀塚見出活

人の知ん幸と悲とをばざる小如る。人の安ん死を憂はざる小如る。か
言のふ外本形も天地社のおぼろしく。小揚雲暮夜小魂全を待く
其卓見後世身と守るその法則と云い。新祝民若小を即と八本

の仁意小周く母の安否訪ひ聖日大川久馬とたふれ龜と出れし。此
幾日おぼろしく大坂も意にあらふ。馬取中はく。彼邪も感し快く。され
八本家破の町人市川屋敷を流し。よまの方に止宿して。二日深長城は
おぼろしく。おぼろしく。老妻如僕も。運るの内之馬意得とら。く。支路は
城下。い。は。皆。後。壺。入。幸。代。運。る。武。今。及。老。翁。の。威。冒。す。は。く。新
後。遊。覧。と。形。を。南。き。と。の。こ。を。威。邪。め。之。系。南。寺。風。の。大。船。社。に。在。ひ。る。を
おぼろしく。後。小。氏。若。小。を。即。と。深。く。身。と。け。し。と。諸。君。北。外。へ。お。せ。お。ざ。り。し。小
事。主。最。き。湯。其。意。と。知。れ。小。を。即。が。退。座。す。人。幸。成。奈。し。又。も。小。を。即。後
活。せ。る。席。へ。お。今。日。を。八。幡。文。の。縁。日。ゆ。く。中。玉。高。津。の。色。流。し。た。け。の。御。意。を
おぼろしく。お。お。は。は。は。と。せ。ち。け。る。小。を。即。左。右。辨。せ。れ。ど。も。強。小。勅。法。を。御。意。に。違。え
ぬ。お。思。ひ。く。ぞ。子。細。あ。る。身。と。殺。ま。ん。も。何。ら。り。討。小。八。幡。文。と。り。矢。さ。れ



小寺所
父の塚
と
茶
畑



吾が七太坂と敷屋一。目下清くはるが如く。徳念八利天一。半國の公
男（はらこ）も亦祝（おまつり）の圓小達一。今いかにさう早打く。只美武州（みぶしゅう）の海原を
我が手にあはす。

[Faint, mostly illegible handwritten text in cursive style, likely bleed-through from the reverse side.]

徳幸 金田羅神 聖紀 卷之九

